

2025 年6月 29日 聖霊降臨節第4主日礼拝

メッセージ「神は光、光の中を歩む」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネの手紙 I Ⅰ章 5 - 10 節

「神は光」と聞いて、皆さんは何を連想されるでしょうか。むしろ、人類の歴史を振り返った時には、「光は神」と言った方が、分かりやすいかもしれません。「人類と動物を分けたのは、火を使うことを覚えたことだ」という話を聞いたことがあります。確かに、夜でも、火を焚いたり、明かりを灯すことで、闇を明るく照らすことができるようになりました。しかし、人間の作り出す光には限りがあります。燃料が無くなったら消えてしまうからです。そのような中で、毎日、朝になると太陽が昇って来て、あたり一面を明るくしてくれ、また温かくしてくれるわけですから、太陽の恵みというのは、古今東西の人々が、生活の中で実感してきたものであり、そこに神の働きを見てきた宗教もたくさんありました。ちなみに「ヘブライ語聖書」の冒頭「創世記」の「天地創造物語」でも、最初に創られたものは、光だったと記されています。

そのような「光」ですが、それと対をなすものとして「闇」があります。「光と闇」というものは、「昼と夜」「善と悪」のように、対極の関係として理解することができますが、今日初めに歌った賛美歌 511 番「光と闇とが」も、そのような世界観で歌われていた賛美歌でした。

Ⅰ 光と闇とが 戦うこの世、 正義と不義とが 争うところ。

今こそわれらの決断の時、 ためらいひるむな、悔いを残すな。

ある意味、とても勇ましいというか、世界を単純に二分して捉えている歌です。どうして、そんなに簡単に、光と闇、正義と不義の二つに区別できるのかと感じながら、改めてこの歌について調べてみると、19 世紀のアメリカで、テキサス併合とそれに続いたアメリカ・メキシコ戦争があり、そのような危機的な社会状況の中で、戦争に抗議する反戦歌として作られた詩だったそうです（『讃美歌 21 略解』）。いつの時代でも、戦争となれば、「自分たちは正義の側で、敵対する相手は悪だ」と言われるでしょうし、そうでも思い込まされなければ戦争なんて、とてもできない

でしょう。いや、そのように教え込まれ、洗脳されていたとしても、それでも戦場からの帰還兵たちの多くは心身を破壊され、病んでいるのが現実です。この賛美歌の作者は、互いの正義を振りかざして戦争が続けられる中、それに反対することにこそ、本当の正義、光があるということを見出していたのだらうと思います。

とはいえ、いつでもどこでも人の集まる場所では、「自分たちは正しく、他の人たちは正しくない」というように人を区別して、グループを作ることが行われていたことも事実でした。今回の聖書「ヨハネの手紙」にも、そのような歴史的背景がありました。この手紙が書かれたのは、おそらく 1 世紀末か 2 世紀の始め頃だろろうと考えられています。「ヨハネによる福音書」と共通したり似ていたりする言葉や考え方が多くありますから、「ヨハネ福音書」を書いた人たちと同じグループか、近しいグループの人たちが書いたのだらうと考えられています。

そして、1 世紀末か 2 世紀の始め頃という時代は、初期キリスト教の共同体にとって、ローマ帝国や、ユダヤ教など、外部からの迫害も激しくなっていた時代であり、また自分たちの内部、仲間内でもお互いに理解し合うことができないという齟齬から、分派分裂、仲間割れが生じていた時代だったと考えられています。そのような状況でしたから、生き残っていくために、どうしても自分たちを正しいとする自己正当化と、他者を批判して排除するような厳しい口調が伝わってきます。

5 節では「私たちがイエスから聞いて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くありません」と明言された後、続いて 6 節「闇の中を歩むなら、真理を行ってはいません」、8 節「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理は内にありません」、10 節「罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであり、神の言葉は私たちの内にありません」などと厳しい口調で述べられています。つまり、自分たちの仲間の中にも、光の中ではなく闇の中を歩んでいる人たちがいる。自身の罪を認めず、「罪を犯したことがない」などと言っている人たちがいる。そのように内部で批判し合うような、内輪もめがあった状況だったということが分かります。

しかし、私たちが暮らしているこの世界は、そう簡単に、単純には割り切れないのが現実です。光である神自身には闇はないかもしれませんが、光を受ける存在で

ある私たちは、光を受けると、同時に影も生じてしまいます。神様に従いたいと願いながらも、従いきれない自分自身も見出します。そのような弱さも足りなさも、また限界も醜さも持ったままの私たちが、神様によって用いられて、歩まされていく……。それが「神の光の中を歩む」ということなのではないかと思います。

「光の中を歩む」とは、暗い部分や汚い部分、自分の弱さが一切なくなることはありません。それらがまるで存在しないかのように目を背けたり、蓋をしたりするのではなく、それらが確かに存在することを認めても、それでもなお、そのまま歩いていけるということです。5 節には「神は光、神の中に闇はない」とありますが、「ヨハネによる福音書」の冒頭 1 章 5 節には、「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった」と謳われています。一見、暗い所が全くないように見えるくらい、明るく照らされた昼間の世界も素敵ですが、その一方で、夜の闇に閉ざされた真っ暗闇の中でこそ、小さな光であっても、光が見えると安心して、光の価値を実感します。闇が広く深い時にこそ、「光」の本当の価値、真価が実感できるというものなのではないでしょうか。「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった」とは、闇は全ての光を消し去ったり、覆いきったり、奪い去ることはできないということです。

私たちは、小さい子どもたちに接する時や、犬や猫や動物たちと接する時によく、「いい子だね」「よしよし」と言って、なでたり、触ったりします。それは何故でしょうか。こちらの思い通りの態度が先にあったからでしょうか。もちろん、こちらが期待している通りの態度があったり、応答があったりしたら、「すごいね」となるわけですが、実際のところ、そのようなものがあってもなくても、むしろこちらの方が先に心を開いて、無条件で「いい子だね」「よしよし」と手を差し伸べていることの方が多くはないでしょうか。そして、相手の方もまた、先に「自分が受け入れてもらえている、この相手には嫌なことをされない、意地悪されたり、怒鳴られたりしない」と感じられているからこそ、安心してこちらに身を任せてくれるのではないかと思います。

9 節にもありますが、「罪の赦し」として語られる際の「赦し（アフィエーミ）」という言葉の元々の意味は、「そのまま行かせる」です。「罪からの清め／不正の清め」

も、闇が光に転ずること、黒が白にひっくり返って、自分の内からすっかり黒、闇が無くなることはありません。もし、そうなったと感じられていたら、それは事実には蓋をして隠して、自身を偽っているだけのことでないでしょうか。光である神は、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(マタイ 5:45) 神でもあります。自身の中の弱さや汚さ、闇は、それらを隠そうとすればするほど、いつの日かそれらが誰かにバレて見つかってしまわないかと、ヒヤヒヤして、いつまで経っても安心することが出来ないのではないかと思います。むしろ、それらを含んだありのままの自分を受け入れ、認めてくれる人たちがいる、ということを信頼して、思い切って明るみに出すことで、安心して深呼吸ができるようになるのではないのでしょうか。

どんなに暗く、深い闇に閉ざされたように感じても、また自分自身の中に一向に明かりを見出せないように感じても、それでも光が闇に飲まれてしまうことはありません。光である神が、もうすでに共にいて下さっている。そのことに信頼して、私たちは今日も割り切れないこの世界で、ありのままに、光の中を歩いて参ります。